

嘉納治五郎の柔術修行とその展開に関する研究

桐 生 習 作

Study of Jigoro Kano's Jujutsu training and that development

KIRYU Shusaku

Abstract

Jigoro Kano, the founder of Kodokan Judo, had complex for his body in childhood. In youth, he challenged to overcome his weak body by Jujutsu. Jujutsu is importantly Japanese physical arts and roots of Judo. Kano learned Tenjinshinyoryu from Hachinosuke Fukuda and Masatomo Iso, and studied Kitoryu from Konen Iikubo. However, there are no papers on difference between Kitoryu and Tenjinshinyoryu and how Kano introduced Jujutsu to Judo in the past. Consequently, we analyzed characteristic of these school's techniques and thought, and how Kano developed these features in Judo. The results of my research are as follows:

1. Tenjinshinyoryu was premised on fighting with armor, so this school made a point of keeping own "Hontai (well-balanced position)" and breaking opponent's balance.
2. Kitoryu was premised on fighting with ordinary clothes, so a huge of situation was mediated by founder. Consequently, Tenjinshinyoryu had 124 "kata" to win actual fight (kneeling position, standing position, being attacked by arms and so on). Almost of these techniques linked death or serious injury.
3. Jujutsu took account of "Ki" and controlling of that. Ideal condition in fight was expressed "Fudochi" and "Fudoshin" by each school.
4. Kano improved "Randori" to contribute to physical education by research for "Hontai" and breaking opponent's balance in Kitoryu. Precious techniques of Jujutsu were introduced to Judo's "kata" ("Koshiki-no-kata" from Kitoryu and "Kime-no-kata" from Tenjinshinyoryu) .
5. Kano valued thoughts of Jujutsu, and effort to introduce these to Judo without using their keywords (Ki, Fudochi, etc).

和訳：

講道館柔道の創始者である嘉納治五郎は身体的劣等を柔術修行によって克服した。柔術は日本の貴重な身体運動文化の1つであり、現在世界的に普及している講道館柔道の原点でもある。嘉納は福田八之助と磯正智から天神真楊流を学び、彼らの死後は他流である起倒流を飯久保恒年から学んだ。しかしながら、これまでの柔術に関する主な著作や論文において起倒流と天神真楊流の異同は詳しく論じられていない。また嘉納が二流を如何に講道館柔道に導入したかについても書かれていない。従って、本研究は起倒流と天神真楊流の技術的特徴と思想について考察し、それらが柔道の中にどのように展開されていったかについて明らかにした。結論は以下の通りである。

- 1 起倒流は鎧組討技であり、「本体」という偏らない姿勢の維持と、相手の姿勢を崩して投げる点に特徴があった。
- 2 天神真楊流は平服での攻防を前提とし、様々な状態（座った状態、立った状態、相手が武器を持っている状態等々）を想定した124もの「形」が存在した。その技は急所への当身技や関節を極めながらの投技等いずれも殺傷性の高いものばかりであった。
- 3 二流とも意志と肉体を結び付ける不可視のエネルギーとして「気」を重視しており、この「気」の扱い方を修得することが修行の目的とされていた。起倒流では「不動智」、天神真楊流では「不動心」といった戦いの場での理想的境地が表現されていた。
- 4 嘉納は当初、学校体育に柔道を入れようと考え起倒流の本体と崩しを活かし自然体に組んで相手のバランスを崩して技を掛けるという科学的原理を重んじ、安全にして全身運動となる「乱取」を工夫した。起倒流の形は「古式の形」に、天神真楊流の形は「極の形」へと継承され、柔道の中で高段者の修行する「形」として位置づけられた。
- 5 嘉納は柔術の心得や極意を重んじたが、柔道においては「気」や「不動智」等のキーワードを用いず、社会生活上の具体的な事例に当てはめて説明する等、表現上の工夫が数多く見られた。

はじめに

我が国の体育家、教育家として有名な嘉納治五郎は幼少から虚弱な体質であったため、自分の身体的劣等感を克服しようと柔術を学んだ。やがて天神真楊流の福田八之助、次いで磯正智に師事したが、磯の死去に伴い他流である起倒流を飯久保恒年に学んだ。彼は柔術修行が心身に優れた教育効果をもたらすことを発見し、1882（明治15）年に講道館柔道を創始した。こうした経緯から、柔道の日本文化としての伝統的な側面を理解する上でも、柔術を正確に把握する作業は不可欠なものと言える。これまで柔術に関する主な著作や論文として桜庭や¹⁾や永木²⁾が挙げられるが、いずれも各流派の成立や技術の解説が述べられているに過ぎず、嘉納が学んだ起倒流と天神真楊流の異同については詳しく述べられていない。また嘉納が二流の柔術を如何に講道館柔道に導入していったかについても書かれていない。そこで筆者は近世柔術の中でも近世初期に創られた起倒流と幕末期に創られた天神真楊流の二流を成立年代順に取り上げ、以下の視点から考察を加えることにした。

はじめに起倒流柔術の成立及びその技術と思想を取り上げ、次に天神真楊流についてみていく。技術的特徴については、伝書による分析から二流の特徴を明らかにし、時代背景による違いについても考察する。また、精神的特徴については「柔よく剛を制す」の理や当時の武術家が重視した「気」の扱い方や「気海丹田」、「平常心」について明らかにし、二流の異同を考察する。最後に嘉納は両流派に対して如何なる考えを有していたのか、またその特徴を如何に講道館柔道に導入していったかについて考察する。

尚、主な資料として起倒流については基本伝書（『本體』³⁾、『天巻』⁴⁾、『地巻』⁵⁾、『人巻』⁶⁾）と江戸中期の『登假集』⁷⁾を、天神真楊流については『天神真楊流柔術大意録』⁸⁾と『柔術極意教授図解』⁹⁾を、さらに柔道については講道館初期の「柔道一班並ニ其教育上ノ價值」¹⁰⁾と明治30年代の「講道館柔道講義」¹¹⁾等を用いることとする。

1. 起倒流柔術の成立と技術・思想

はじめに、起倒流の成立についてみてみる。起倒流の起源については諸説ある¹²⁾。ここでは茨木又左衛門俊房（専齋と号す）を流祖とする説をとりながら、起倒流をみていきたい。この流派は未だ戦国乱世の気風が残る近世初期に成立したため、鎧組討としての技術に実用性が求められていた。1637（寛永14）年に柳生三厳が著した『月之抄』¹³⁾の中には「乱の事又左衛門工夫の目録」として、茨木が編み出した「起倒流乱目録」を柳生宗矩に進呈した経緯が記されている。その中で流儀については「体すぐなるにより、勝ある心なり。出て入る心持。車、敵に随いまはり居る身すぐなり。拍子いきの大事」¹⁴⁾と書かれており、茨木が体（後の本体）と車（回転技）、請（今日の受身）を備えた「乱」を編み出したことが記されている。また起倒流という名称については「右之一巻は兵法の心持を以て、奇妙得心誠に神妙にかなへる処なり。然れども尋入、たよりなきにより、名を乱と名付け、右之一巻を書して心持を沢庵へ御物語申せば、則起倒流とあそばし、習の心持に模稜の手と名付給う也。老父も一卷の奥に筆をくはへて、兵法の以て鍛錬自由分別、乱起倒流と相定候義、奇特神妙々々、今に至て無之義、別而感入しなり」¹⁵⁾と記されており、禅僧沢庵宗彭が命名したものであった。尚、当時は起倒流乱の名前で呼ばれていた。

次に、基本伝書から起倒流の教習課程についてみていきたい。起倒流では入門すると『本體』をまず学び、次いで『天巻』、『地巻』、『人巻』を与えられ、実技として21本の「形」を修行したのである。『本體』には「本躰者体之事理也。専ら離れ形を扱う氣を。不れば得正理を己に不知ら扱うことを氣。静貌至る所得て静氣を、敵之強弱通達すれば、則ち千變萬化、無し不制敵を。是れ則ち中る虚實に。為るは本、務むる躰之正を己。故に本體と云ふ爾」¹⁶⁾と記され、本体という倒れない、崩れないための姿勢をとることの重要性がくり返し説かれている。起倒流21本の「形」の内容は次頁の通りである（表1参照）。

表1 起倒流の形¹⁷⁾

取形十四形	裏（不取段）七形
体 夢 中	身 碎
力 避 水 車	車 反
水 流 曳 落	水 入
虚 倒 打 碎	柳 雪
谷 落 車 倒	坂 落
鋳 取 鋳 反	雪 折
夕 立 滝 落	岩 波

表14本は1本ずつ区切って行い、裏7本は「一裏七形を不取段といふこと、不断修行に氣の段をとらぬといふ儀なり。勝負の業にも自然と叶う事なり」¹⁷⁾とされ、1本ごとに区切らないで行われる。起倒流は重い鎧を着けているため、「身碎」では「取はこの押し返す力を利用しながら左足を左後に退いて体を左に開き、右足を受の右足外側に踏み込み、左腕は押し上げ、右手は受の手首を押し下げ、受が前方に浮き崩れた瞬間、受の脚下に体を仰向けに捨てながら、両手をさらに強く利かせて、受をその前方へ体越しに投げる」¹⁸⁾というように、横捨身技で投げる技法が多い（「水入」、「谷落」等）。また「雪折」は背後から抱き抱えてこようとする相手に対して「その瞬間、両腕を開いて受の右腕を上から抱えながら（右手は受の上腕、左手は前腕）、右膝をついて体を落とし、背越しに投げる」¹⁹⁾として、後方より攻撃された際に相手を背負って投げる技であった。

次に、起倒流の思想面は次の様なものであった。『天巻』には「起倒是、をきたをとと訓ず。起は陽の形、倒るは陰の形なり。陽にして勝ち、陰にして勝ち、弱にして強を制し、柔にして剛を制す。我力を捨て、敵の力を以て勝つ。不_レ然_レして吾_レが力を頼み、我_レが力を出す心あらば、勝利不_レ全_レから。勝利全き処、貌は敵に随_レて変ずれ共、我_レが心不動にして、正静なる時は、不_レ可_レから_レ有_レる_レ不_レんば_レ得_レ利_を」²⁰⁾と記されている。明らかに戦場での雌雄を決する攻防術であり、その際に「柔よく剛を制す」ことが要求され、自分の力を捨て敵の力に従って勝つことが説かれている。こうした記述からも、当流の目的は戦場において相手を殺し傷つける武術であったと言えるのである。但し、「敵とみて、しかも心不_レ動_が、虚靈にして、安く対する処、本體そなわれるなり。是れ不動智と云_う」²¹⁾と記されているように単に肉体上の技法のみならず、「不動智」という精神的境地にまで目を向けている点に起倒流の理論の高尚さが窺える。尚、この「不動智」とは言葉は1638（寛永15）年に沢庵が著した『不動智神妙録』に記されており、この書物は彼が新陰柳生流の柳生宗矩へ剣禅一如を説いたものである。同書において「不動智」とは「不動とは、うごかずといふ文字にて候。智は智慧

の智にて候－中略－不動明王と申して、右の手に劔を握り、左の手に縄を取りて、齒を喰出し、目を怒らし、佛法を妨げん悪魔を、降伏せんとて突立て居られ候姿も、あの様なるが、何國の世界にもかくれて居られ候にてはなし」²²⁾と記されており、「不動智」とは不動明王の境地を体現したものであると説いている。闘争の場面における「不動智」の効果については「物一目見て、其心を止めぬを不動と申し候－中略－譬へば十人にして一太刀づつ我へ太刀を入るも、一太刀を受流して、跡に心を止めず、跡を捨て跡を拾ひ候はば、十人ながらへ働を缺かさぬにて候。十人十度心は働けども、一人にも心を止めずば、次第に取合ひて働は缺け申間敷候。若し又一人の前に心が止り候はば、一人の打太刀をば受流すべけれども、二人めの時は、手前の働抜け可_レ申候」²³⁾と述べ、1つの現象にとらわれない心身の状態を身に付ければ、大勢の攻撃にも対処出来ると説かれている。こうした沢庵の教えは、我が国の武術全般に大きな影響を及ぼしたのである。

また『地巻』の「志気力差別之事」を例に挙げれば「志と気と力との差別、わけていひがたし。しかれども、是を分ちていはば、志の趣きにつれて、そのむかふ物をとらむと手の出るは、志にしたがひ、動きて気のかよふ故なり。其の物を持上ぐるは、気に随ひ、集る処の力なり。力が出る所には気集り、気のかよふ所には力もしたがひ寄るといふ事、さだまりたる理にして、気力不二となる。しかれ共、爰に差別をなして記す事、力を先立て、業をせば、其の害甚だし。是れを以て力を捨て、只気の扱ひを修行せしめんためなり」²⁴⁾と記されているように、修行上最も「気」の扱いを重視している。ここでの「気」とは同伝書「気体之事」において「当流、もつぱら気持扱いを教えて、業をなさしむるといへども、気と云いて、あらわれたるものにあらず」²⁵⁾と記され、正しく技をかけるために必要な不可視のエネルギーとして説かれている。この「気」の扱いが不十分なまま無理に「力」を出して技をかけることが強く戒められている。このように起倒流では、力みを避けるために「気」のコントロールが十分なされた上での技を非常に重視していた点に特徴がみられた。

2. 天神真楊流柔術の成立と技術・思想

天神真楊流は幕末に紀州藩士であった磯又右衛門正足が創始した流派である。正足は柔術修行のために江州草津において3年程修行をしていた。『天神真楊流柔術大意録』には、「ある時人のために我師并^びに門弟西村氏と兩人にて、百余人をあいてにして、奥義の術を以て追_いちらし、仁命を介く也。此時初めて我師当身の事を発明し。尤柔術は戦場にては組打を専一とす。治世にては当身を専らとする事、諸師の知る所なり。然れども未だ諸流常に真の当身を以て修行する事を不_レ知^る。我師柳閑斎先生は仁命を救わんがため、所々にて真劔の勝負をして、常に真の当を以て修行せざれば、勝利なき事を悟りて、柳閑斎先生は真当を請くる事を工夫して、常に当てを用ひて修行する也。又柔能く剛を制せしむるの意に違ふ所も数年心を砕^き、終に其心を得て、妙術に及^びて、両流合流して一派を建て、手数百式拾四手と

定めて、天神真楊流と号し一流とす」²⁶⁾と記され、磯正足は大勢を相手にした際に当身技の大切さを感じ、楊心流と真之神道流を合流して天神真楊流と名付けた、と説かれている。幕末期となると大きな戦争も無くなり、治世には当身技が必要となり、普段着のままで攻防できる平服組討技に特徴があったと言える。また「柔よく剛を制す」精神を追い求め、終にその心を得たと記されているように、当身技には非力でも剛の人を制することが出来、更には1人で多くの相手と戦えるといった利点があったと言える。前節で取り上げた起倒流が鎧組討を主体としていたため当身技ではなく投技を中心に構成されていたのに対し、天神真楊流は軽装で数人を相手に戦える当身技を中心に構成した点に特徴があったと言えるだろう。

ところで、天神真楊流の流旨は「夫^レ大意と申^スは、武具をしたがへず、今出生したる所のあかはだかの理を極め、極意の大事を極む。其上にて武具を随ひば、内外即^チ合体、心は身に随ひ、身は武具を随がわしむるの儀なり。武具に身を随がわしむるうれいなし。格成^ル故、戦場組打の為に今日身体自由の業をなす」²⁷⁾と記され、普段から心の命ずるままに体が動けるようにしておけば、甲冑をつけた時でも自在に攻防が出来る、と説かれている。そして当流の目的として「常に心の扱ひを修行して心を主人とす。手足を臣下とす。和合の道に叶^ヒて、物具着用して身体自由をなすところを要とする也。格戦場の用方に成^ル事を不^レ知^ラして、貴人高家杯の稽古すべき物に思わず、又は乱酒乱心の輩に出合^ハいたる節用^ウべき様に心得、いささかの小理を付く、是全く文道に達しても、武道に暗き者のいふ所也」²⁸⁾と記され、柔術の本来の目的は戦場において身を守り敵を殺傷することと説かれた。天神の名称は、正足が京都の北野天神（主神菅原道真）祈願により新しい技を開発したことにより名付けられたものであり、また真之神道流と楊心流の師匠への義理に背かないように両流派名を残して、天神真楊流と名付けたものであった。

当流の「形」には当身技だけでなく、投技や関節技、絞技を含んでおり、総合武術であったといえる。『柔術極意教習図解』によると、124本の技は以下の通りになる（表2参照）。

この表によると、初心者はまず手をつかまれた時に、如何にそれを解くかという「手解」から入る。それを修得すると、次は「初段」に昇格し、居捕と立合を20本学び、師から許しを得ると今度は「中段」を28本学ぶことになる。最後は「極意上段」に昇格し、同様に20本修得すると「免許」となり、弟子とりが出来たのである。幕末には柔術も「形」の教習課程が工夫され、流派存続が十分にされたと言える。次に、個々の技を『柔術極意教習図解』の解説から分析してみる。「突掛」では自分の鳩尾を突いてくる相手の拳を体さばきでかわし、「突出シタル手ノ甲ノ方ヘ左手ノ拇指ヲ掛ケ、内平ノ方ヘ四指ヲ延シテ掛。右手モ又左手同様ニ成シ、指先ヲ左指ト深く重ネ、右足ニテ受身ノ陰囊ヲ踢（二圖参照）テ、直ニ其足ヲ受身ノ左右ノ足ノ中程ヘ踏出テ、我體ヲ右ヘ一廻シテ受身ノ左脇ヘ並様ニナシテ、直ニ右足ノ爪先ヨリ三尺四五寸離レテ左膝ヲ突キ、腰ヲ下ゲテ横一文字ニナリ、此時迄手先ノ動カヌ様ニシテ、我體ノ中心ヲシカト定メ、而シテ受身ノ指先ガ我前ノ地ヘ付ク位ニ手先ヲ丸ク廻スガ如ク、又左ヘネジルガ如ク強ク力ヲ入レズシテ受ノ體ヲ投ルナリ。夫ヨリ左右

ノ手ヲ前ノ方ヘ眞直ニ伸シ、肩ヲ下ゲテ面ヲ右ノ爪先ノ方ヘ向ケ、左右ノ手ノ小指ニ少シク力ヲ入レルナリ」²⁹⁾として、相手に当身技を施し、次いで関節を捻って投げ倒している。関節技も「小手返」では手首関節を折る様な技が使われ、投技の「鐘木」や「片胸捕」では、素手の部分を掴んで外掛けに相手を倒すという大変危険な技であった。「形」における2人の関係は、「添捕」という技では、「此手合ノ形ハ受身ノ右脇ヘ七八寸離レテ坐シ（中略）次ニ捕身ノ方モ」³⁰⁾と記されている様に、最後に技を極められる者を「受身（請身）」、最後に技を極める者を「捕身」と区別したのである。

表 2 天神真楊流の形

段階（本数）	技 名
手解（12本）	鬼拳、振解、逆手、逆指、片胸捕、両胸捕、小手返、両手捕、氣捕、天倒、扱捕、打手
初段居捕（10本）	眞之位、添捕、御前捕、袖車、飛違、拔刀目附、鎗返、両手捕、壁添、後捕
初段立合（10本）	行違、突掛、引落、両胸捕、連拍子、友車、衣被、襟投、手髪捕、後捕
中段居捕（14本）	眞之位、手巾捕、左胸捕、右胸捕、御前捕、袖車、飛違、拔刀目附、奏者捕、柄止、膳越、両手詰、左右曲、引立
中段立合（14本）	行違、向山影、後山影、腰附、小手返、頭捕、連拍子、廻込、柄碎歸投、壁添拒、腕挫、諸別、大小捕
投捨（20本）	鐘木、刈捨、朽木倒、腰車、横車、片胸捕、手髪捕、小具足、腰刈捨、獨鉈、小手返、引落、手繰、捨身、下り藤、腕緘、矢筈、両手捕、両柄捕、後捕
試合口之事（3本）	名称なし
別レ崩シ之事（3本）	同上
横車崩之事（3本）	同上
突込崩之事（3本）	同上
眞之位崩之事（3本）	同上
居別崩之事（3本）	同上
袖車崩之事（3本）	同上
裸體捕之事（3本）	同上
極意上段立合（10本）	踢返、面影、諸手碎、杉倒、大殺、浪分、猿猴附身、手矩捕、兩非、天狗勝
極意上段居捕（10本）	後鎖、脇鎖、後捕、片羽縮、矢筈、突掛、無二劍、見刀曲、龍虎、暫心目附

次に、天神真楊流の思想についてみていきたい。『天神真楊流柔術大意録』には「志と氣と力との差別はいかん」の中で「分けていふがたし。然れども、是をいはば志差の起るにつれて、其向^かふものを取らんと手の出るは、何ぞなければ、志に随ひうごきて氣のかよふゆへなり。其物を持扱ふは、何ぞなれば、氣に随ひ集^{まる}所の力^{りき}の出る所には氣集^{まる}り、氣かよふ所には氣力も随ひするという事定りたる理にて、氣力不二となる。然れ共ここに差別を

なして記す事は、力を先だて業をせば、其害甚多く、是を以て力を捨て、只気の扱いを修行せしめるため也。業を熟するに至りては、人々の有り来る所の力気の働きにつれて、其業に応じ出る事、教をまたずして備うべし、是元氣不二の所也」³¹⁾と記され、「志」とは意志であり、「気」は意志に従って動くもので、この「気」の集まる所を「力」と呼んだのである。但し、「気」と「力」とを分けたのは、力みは正しい技の習得を妨げ、「気」が全身に行き渡れば臨機応変に対処できるという教えであった。この頃になると、「気」の置き所も具体的に書かれるようになる。当時の稽古法は「形」が中心であり、その心構えは「武術の稽古の形は死者にも不_レ有_ラ、活物にも不_レ有_ラ。先稽古に望で皆敵と思ひ、位を取りて前心・通心・残心、此三つ守体をやわらにして、気海丹田に気を納め、勇氣をふくみ、敵死物なりとも我活物と思ふて、我が一心を以て修行する時は、是_レ活物の稽古ならずや」³²⁾と記され、「気」を「気海丹田」に納めて勇氣を含んで行うことにより活きた稽古になる、というものであった。普段の稽古も常に白刃中に飛び込む気持ちで行えば活きた稽古になり、実戦でも役立つとされたのである。この「気海丹田」とは「気」が集まる所とされ、臍下1.5寸(約4.5cm)の所とされた。今日でもこの丹田の位置は重心とほぼ同一の場であり、「気」を臍下に置くことにより上半身の力が抜けて自在に対処できるとされていた。さらに大切な心構えとして「不動心」を説き、「不動心とは、うごかざる心也。心正明にして惣身へ氣満ち渡りて、白劍を眼で見ても心に不_レ見、或者は、大筒の音を耳に聞いても、心に不_レ聞かして、物毎にとふとふ動かざる所なり。是を大丈夫といふ」³³⁾と述べ、不動にして自在な心の状態を理想的な境地としている。この心境を得るための修行として「いにしへの修業者、乱国之節なれば、生_レながらして太刀音を聞_クゆくに、白劍を以て勝負をなす。この常なり。尤も其比は腹の修行の爲、野に伏し、山に伏し、或は人の行かざるところに行き、物にどうじざる所を専_ラと修行なすがゆへに、自然と不動心に至るなり。当世の修行は、体に術有りても、腹に術なし。能_ク々此所を考えて、不動心に至る事を専一に工夫して修行有_ルべし」³⁴⁾と記されているように、腹の鍛錬を重要視している。「不動心」とは腹を鍛えて得られる何物にも動じない心であり、武

術家にとって「気」の扱い方や「気海丹田」は心身の状態と密接に関連する大切な要素であったのである。

最後に天神真楊流では、入門や目録、皆伝の際には師匠に次の様な誓紙を提出している(図1参照)。

修行者は技を他人にもらしてはならず、修行未熟のうちは師匠を恨まず、途中で辞める際はその理由を述べ、免許を取るまでは他流試合をしてはならないと約束したのである。

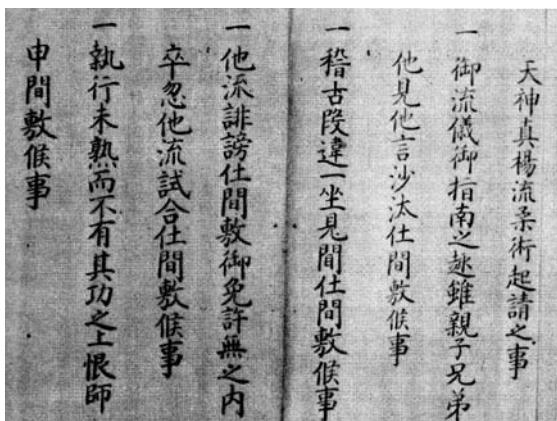


図1 天神真楊流起請文³⁶⁾

3. 嘉納治五郎の講道館柔道における二流の展開

ここでは起倒流と天神真楊流の特徴が柔道へどのように展開されたのかについて、「柔道一班並ニ其教育上ノ價值」や「講道館柔道講義」、ならびに明治28年に制定された「講道館五教の技」³⁶⁾を中心にみていきたい。嘉納は起倒流入門以前に福田の下で2年間、磯の下で2年間の合計4年間天神真楊流を修行している。その後、磯の死去に伴い、1881（明治14）年に起倒流の飯久保に巡り会い、4年間修行して起倒流の免許を得たのである。1882（明治15）年に東京下谷の永昌寺で柔道を始めた頃は、12畳の道場に9名の修行者がいた過ぎず、これを如何に国民に普及していくかが嘉納の課題であった。従来柔術の稽古は「形」だけの所が大半で、「形」の後に補足として乱取を行うところも少し存在した程度である。しかし嘉納は「形と乱取とを同じようにやれば、多くのものは、乱取に身を入れて、形を閑却する恐れがある。そこで、自分が講道館を起した当初には、形というものは、これをきりはなしてほとんど教えてはいない。乱取の合間合間に形を編み込んで教えるという方針をとった」³⁷⁾と記し、乱捕の合間に「形」を教える方針を採ったのである。当時の「形」の内容は「最初のうちは、天神真楊流または起倒流の形を、昔のままで教えていた」³⁸⁾と記し、当初は天神真楊流や起倒流で習った「形」であったことが分かる。段々と修行者が増え乱取が盛んになると「多人数の稽古に対してはどうてい手が届かぬから、いろいろのわざの代表的のものを撰んで、比較的手を動かすことの多いものを三種類、腰をはたらかすことの多いものを三種、足をはたらかすことの多いものを三種、真棄身から三種ほど、横棄身から三種撰んで、投の形としてこれを教えることとした」⁴⁰⁾と記し、多くの修行者が技の原理を学べるように「投の形」を創ったと述べている。明治20年代になると「天神真楊流の形」は行われなくなり、代わりに15本の「真剣勝負の形」を作り、やがて1906（明治39）年には居取8本、立合12本の「極の形」になったのである。「起倒流の形」は、投技の柔術諸流の「形」の中で最も高尚であり、講道館「古式の形」として保存したのである。一方、柔道乱取技への影響について「起倒流の形」と「講道館五教の技」（以下、「五教」）を比較してみると、「起倒流の形」の「水入」や「身砕」における横に体を捨てる技は「五教」の「横分」に導入され、起倒流の「谷落」は「五教」の横捨身技である「谷落」に、また後方より抱きつく相手を背負って投げる「雪折」は「五教」の「背負投」に導入されたといえる。

ところで、嘉納は1889（明治22）年に大日本教育会の招きで「柔道一班並ニ其教育上ノ價值」と題して、文部大臣榎本武揚らを前に講演を行う。その中で、嘉納は起倒流の技術について「相手カラ何カ仕掛ケラレルト、急ニ恐レテ基本體ヲ失ヒ、體ヲ傾ケル所カラ容易ニ投ゲラレル様ニナルノデス。起倒流ノ形デハ此ノ本體ト云フ偏セザル體ヲ守ルコトヲ練習サセマス」⁴⁰⁾と記し、本体という前後左右に偏らない姿勢を練習させるのにふさわしいと述べている。また起倒流の理合については「立ツテ居ル人ヲ倒スニ最モ容易ナル方法ハ、其人ノ體ヲ孰レカノ一方ヘ傾カセ、片足ノ一部分ナリ兩足ノ踵ナリ成ルベク小サナ面積ノ所ニ全

身ノ重ミヲ載セサセ、斯ク重ミノ乗ツテ居ルカ、コレカラ乗ロウトスル所ヲ掃ヒナリ引キナリシテソノ支點ヲ外スノデ御坐イマス。一中略一ソウシマスト相手ノ體ハ危ク成リマスカラ、相手ハ元ノ體勢ヲ回復シヨウトシテ必ズ又足ヲ蹈ミ替ヘマス。ソノ時此方デモ亦相手ノ動キ方ニ應ジテ動イテ参リマスト、遂ニ相手ノ體ハ此方デ少シデモ技ヲ掛ケレバ忽チ倒レル様ナ極ク剣呑ナ位置ニアリナガラ、實際ニハマダ立ツテ居マスノデシテ、申シテ見ヨウナラ生マ殺シトデモ云フ様ナ有様ニ成リマス。相手ヲソンナ風ニスルコトハ體ヤ四肢ノ一種ノ作用デ出來ルモノデシテ、ソノ作用ハ矢張起倒流ノ形デ練習致シマスノデス」⁴¹⁾と記し、相手の体勢を崩して技をかける理合を学ぶためと説明している。

嘉納はこうした点を評価したが、学校体操としては「第一運動ノ種類ガ少ナク、第二ニ僅カナ運動ヲ爲スニ大層永イ時間ヲ取リマス。ソノ上ヘアノ形ヲ學校ノ生徒ナドニ遣ラセルニハ、場所ヲ取ツテ到底行ハレマセヌ」⁴²⁾と記し、運動の種類が少なく、わずかな運動をするのに時間と場所をとり過ぎるため、そのまま採用するには不適當であると説いている。また武術的な観点からも「あの形を今勝負の法を練習するための形として見ますと初めから教えるにはあまりに高尚過ぎます一中略一ただ高尚に過ぎるばかりでなくあの形は投の理合だけを教えますが勝負の法として見れば投のほかには捕えたり打ったり突いたりすることも教えなければなりませぬ」⁴³⁾と記し、初心者には高尚過ぎ、武術としては投技中心で当身技に欠くと批判した。但し、こうした欠点はあるものの高尚な投技の原理を学べるため、ほぼそのままの形態で「古式の形」として残し高段者に行わせたのである。

次に「天神真楊流の形」についての嘉納の評価をみていきたい。嘉納は大日本教育会の場合で「天神真楊流の形」も実演し、その理合いとこれを創り上げた先人の苦勞に敬意を表しながらも「あの形をあのままそっくりと今日に用いることは不都合であろうと思われます」⁴⁴⁾と断言しており、その理由を嘉納は「彼ノ形ノ中ニハ木刀ヲ挿シ小太刀ヲ持ツテ致シマスノガ幾個モ御坐イマシタガ、今日ハ其レ等ノ形ハ後廻シニ致シテ置イテ宜シカロウト思ヒマス。又彼ノ形ノ中ニ廣袖ノ衣物ヲ着テ居ラネバ出來ヌノガ幾個モ御坐イマスガ、是レ等モ今日ノ様ニ筒袖ノ衣物ノ多イ世ノ中デハ不都合デス。又彼ノ形ハ外觀ヲ善クスルガ爲メニ却テ實際ニハ遠イカト思ハレル所モ随分アル様デス。其他餘リ手ヲ振デツタリ咽喉ヲ絞メタリスルコトガ多イ所カラ、實際ハサテ措イテ、世ノ人ヨリ見ルトキハ、柔術ハ體育ノ法ニアラズシテ却テ體育ノ法ニ背イテ居モノ、如ク思ハシメルノ恐レガ御坐イマス」⁴⁵⁾と述べ、攻防の条件（服装や環境）が近代社会に不適當なこと、華法化した実戦性の低い技術が含まれていたこと、そして危険な技術が多いことを挙げ、柔道の体育的価値が世間の人々に疑われる恐れがあったと説いている。嘉納はこうした「天神真楊流の形」に存在する武術的要素をなるべく避けるため、「小手返」の様な手首を極める技や一撃必殺の当身技を省き、柔道の乱取や「形」（極の形）においては肘関節のみを対象とした「腹固」や「脇固」といった技を採用したのである。また、乱取に関しては天神真楊流の「向山影」は、相手を背中合わせに担いで頭から投げ落とす危険な技のため、相手の腹側を自分の肩にあてて投げ落とす「肩

車」に変え、「片胸捕」や「鐘木」は稽古着でなく直接手首をつかんで外掛けに行く技であったが、柔道では襟と袖を持つての「大外刈」として「五教」に採り入れていくのである。さらに嘉納は「鐘木」、「向山影」、「水入」といった技名についても、柔道の中では主に使用する身体部位や具体的な動作をイメージし易い「大外刈」、「肩車」、「背負投」といった新しい名称を採用した。

次に思想面について見てみると、起倒流と天神真楊流共に修行上の心得や心法に関する記述が多くみられた。中でも心身の関係については両流派とも「志」、「気」、「力」という共通のキーワードを用いており、特に修行論において柔術は「気」の扱いを学ぶものであるという点も共通していた。その修行法についても起倒流が「己が方寸の元気をやしなひ、ものに心をとめず、其^の基となる所を健固に守れば——中略——起居動静とも常偏の平気となる。是^れ則^ち天の巻に云^う所の不動智なり」⁴⁶⁾、天神真楊流も「己が方寸の元気を養ひ物に心をとめず、只其^の基^いとなる所を健固に守れば——中略——起居働静共と、常遍の気となりて業をなす。是^れ則^ち大丈夫といふ也」⁴⁷⁾と記されているように、「気海丹田」を鍛えることで「不動智」や「大丈夫」といった理想的な境地に至ることが出来るというものであった。この様に、柔術は「気」の概念を用いた心法論が多くみられたが、嘉納はこうした柔術の精神的特徴をどのように柔道へ導入したのであろうか。「柔道一班並ニ其教育上ノ價值」によれば柔道の目的は体育、勝負、修心の3つがあり、その中で修心が柔道の精神面について言及しているため、「柔道修心法」の記述と比較してみる。「柔道修心法」の内容は大きく柔道修行を通した知育と徳性の涵養、そして勝負の理論を社会生活に応用することの3点について説かれている。徳性の涵養は「修行ニ固有ノ性質カラ自然ニ涵養スルコトノ出来ル」⁴⁸⁾場合と「柔道ニ關係ノアル總テノ外圍ノ事情ヲ利用シテ、殊更ニ德育上ノ教授授ケテ其目的ヲ達スル」⁴⁹⁾場合の2通りがあると述べ、ここでは特に道場における様々な人間関係（教師、稽古仲間等々）から「愛国心」、「高尚な気風」、「勇壮活潑な性質」、「親切」、「礼儀作法」、「自制心」等が養われると説明している。また知育については他人の乱取を注意深く見て「或ル仕方デ技ヲ掛ケレバ善イトカ何ウスレバ悪イトカ、斯ウ云ウ風ノ時斯ウスルト旨ク投ゲルコトガ出来ル」⁵⁰⁾といった分析を行うことで観察力が養われる他、「記憶」、「試験」、「想像」、「言語」そして「大量」といった知的要素が養われると説明している。最後に勝負の理論については「自他ノ關係ヲ見ルベシ」、「先ヲ取レ」、「熟慮断行」、「止マル所ヲ知レ」、「制馭術」そして「柔道ノ奥義」を挙げ、これらが修行のみならず実生活においても如何に有用であるかが具体的に説かれている。「先ヲ取レ」とは勝負において「向フカラ仕掛ケテ來ラレナイ前ニ自分ノ方カラ仕掛ケロ」⁵¹⁾という教えであり、これは事業を始める際の心得としても非常に重要であると説明している。このように「柔道修心法」の内容には「気」に代表される柔術の精神的特徴を表す概念は一切用いられていない。しかし、「勇壮活潑な性質」、「自制心」、「先ヲ取レ」といった記述においては柔術の修行上の心得や極意といった精神的特徴と類似した内容が多く認められた。また「講道館柔道講義」には乱取の心得について

「心の静穏ということを務めなければならぬ。心が静穏になっていれば、彼の変化はよく我が眼にも見え、心にも映ずる。我が身体四肢もその場合に適した命令を受けて働くことが出来る。周囲のことに心が奪われない。それゆえ第一心を静穏に保っておいて、乱取のことにみに注意を集めなければならぬ」⁵²⁾ といった記述が見られるようになる。つまり、静かで穏やかな心の止まらない状態であればどのような状況でも相手の変化を正確に捉え、またその変化に対して自在に身体を動かすことが出来るという境地が説かれており、ここには起倒流の「不動智」や天神真楊流の「不動心」に通じる点が多い。このように嘉納は柔術の精神的特徴を評価し、その内容を柔道の中に積極的に導入していくが、その際に一般の人々への配慮から具体的で分かり易い表現へと改める工夫をしていったと言えよう。こうして嘉納は二流の柔術を学んだが、柔術の武術性は尊重しつつも、明治という新たな近代社会に入り国民教育として、また学校体操の一教材として生かしていく為の、様々な対策を講じていったといえるだろう。

おわりに

起倒流は自他共に甲冑を身にまとして組討を行う鎧組討技であり、甲冑を着用すれば当身技に対しては強いが、一方でバランスを崩すと立て直せないといった弱みも出てくる。そのため、起倒流では本体という前後左右に偏らない姿勢を如何に維持し、また相手の姿勢をいかに崩して投げるといった点を重視していた。嘉納は「起倒流の形」は学校体育として幾つか欠点があるとしながらも、高尚な理論を有するとして「古式の形」として継承し、乱取技としては「横分」、「谷落」といった横捨身技や「背負投」を採用していった。次に、天神真楊流は甲冑を脱いだ平服の状態での攻防を前提としており、甲冑を着なければすばやい体さばきは可能だが、武器は勿論のこと相手の当身技などあらゆる攻撃から弱くなる。そのため、天神真楊流では座った状態、立った状態、相手が武器を持っている状態等々、様々な状況を想定した124もの「形」が存在した。その技術は急所への当身技や関節を極めながらの投技等、いずれも殺傷性の高いものばかりであったため、嘉納は学校体育としては採用不可と判断し、殺傷性を減らして肘関節のみを極める技に改変し、「極の形」という名称で主に高段者が修行する「形」とした。乱取技としては真捨身技としての「巴投」や「大外刈」、「肩車」などの技が天神真楊流の影響を受けている。このように、嘉納は講道館柔道を創始するにあたり、体育法という立場から安全にして全身運動となる乱取を重視し、起倒流の本体と崩しを活かし自然体に組んで相手のバランスを崩して技を掛けるという科学的原理を大切にした。一方、勝負法の立場からは、柔術の関節技や当身技等の危険な技は「形」として保存したのである。

さらに、柔術の精神的特徴については二流とも「気」を重視しており、人間の意志に相当する「志」と肉体に相当する「力」とを結びつける不可視のエネルギーとして説かれてお

り、この「気」の扱い方を修得することが修行の目的とされていた。また、起倒流では「不動智」、天神真楊流では「不動心」といった戦いの場での理想的境地が表現されていたが、これらはいずれも「気海丹田」に「気」を集めて鍛えること（腹を鍛える）を説いたものと言える。こうした思想は嘉納も重んじており、柔道修心法の内容に柔術の極意や修行上の心得等を活かしていく。修心法の内容は知育、徳育、さらには勝負の理論を社会生活に応用することにまで言及されたものである。但し、柔道における独自の展開として「気」等のキーワードを極力用いず、「勇壮活発な性質」や「先ヲ取レ」などの社会生活上の具体的な事例に当てはめて説明する等、表現上の工夫が数多く見られた。嘉納が取えてこうした説明を行った背景には、柔術の思想にも教育的価値を認め、それを近代社会における学校体育に活かし、将来国を背負って立つ青少年を育成しようという目的があったのである。

嘉納が工夫した「乱取」は、修行者の間で徐々に競技の手段へと変わっていく。明治30年代以降に対校試合が盛んになるにつれ、嘉納は徐々に苦言を呈するようになる。競技化に対する嘉納の警鐘と、その後の展開については今後の課題としたい。

註

- 1) 櫻庭武 (1935): 柔道史攷、目黒書店。
- 2) 永木耕介 (1985): 古流柔術における思想解明の一試論——特に中国医学との関連から——、武道学研究18 (1)、5-14頁。
- 3) 貞庵、瀧野太仲、源義信 (1745): 本體、(編) 今村嘉雄 (1982): 日本武道大系第6巻、同朋舎出版、371-372頁。
- 4) 今堀吉之助、平能寛 (1792): 天巻、(編) 今村嘉雄 (1982): 日本武道大系第6巻、同朋舎出版、373-375頁。
- 5) 貞庵、瀧野太仲、源義信 (1745): 地巻、(編) 今村嘉雄編 (1982): 日本武道大系第6巻、同朋舎出版、375-379頁。
- 6) 貞庵、瀧野太仲、源義信 (1745): 人巻、(編) 今村嘉雄 (1982): 日本武道大系第6巻、同朋舎出版、379-380頁。
- 7) 寺田正浄 (1729): 登假集、(編) 渡辺一郎 (1979): 武道の名著、東京コピー出版部、169-184頁。
- 8) 寺崎某 (年代不詳): 天神真楊流柔術大意録、(編) 今村嘉雄 (1982): 日本武道大系第6巻、同朋舎出版、451-459頁。
- 9) 吉田千春、磯又右衛門 (1893): 柔術極意教授図解、(編) 渡辺一郎 (1971): 史料明治武道史、同朋舎出版、125-180頁。
- 10) 嘉納治五郎 (1889): 柔道一斑並ニ其教育上ノ價值、(編) 渡辺一郎 (1971): 史料明治武道史、同朋舎出版、81-97頁。
- 11) 嘉納治五郎 (1898～1902): 講道館柔道講義、(編) 講道館 (1988): 嘉納治五郎大系第3巻、本の友社、2-81頁。
- 12) 寺田勘右衛門満英が起倒流を創始したという説があるが、彼は後に出雲国松江藩において直信流柔道を創始している。また福野七郎右衛門を流祖とする説もあるが、柳生三厳が著した『月之抄』に彼が良移心当和を名乗り、またその伝巻を残していたことが伝えられていることから、今村は英木又左衛門専斎俊房を起倒流の流祖とする説を支持している。
- 13) 柳生三厳 (1637): 月の抄、(編) 今村嘉雄 (1982): 日本武道大系第1巻、同朋舎出版、152-225頁。
- 14) 同上、218頁。
- 15) 同上、218-219頁。
- 16) 前掲3)、372頁。

- 17) 前掲7)、181頁。
- 18) (編) 柔道大事典編集委員会 (1999) : 柔道大事典、アテネ書房、394頁。
- 19) 同上、409頁。
- 20) 前掲4)、373頁。
- 21) 同上、373頁。
- 22) 沢庵宗彭 (1638) : 不動智神妙録、(編) 沢庵和尚全集刊行会 (1939)、沢庵和尚全集第5巻、巧藝社、3頁。
- 23) 同上、3-4頁。
- 24) 前掲5)、378頁。
- 25) 同上、377頁。
- 26) 前掲8)、452-453頁。
- 27) 同上、454頁。
- 28) 同上、454-455頁。
- 29) 前掲9)、141-142頁。
- 30) 同上、137頁。
- 31) 前掲8)、458頁。
- 32) 同上、455頁。
- 33) 同上、459頁。
- 34) 同上、459頁。
- 35) 同上、440頁。
- 36) 講道館柔道の投技指導要目。1895〔明示28〕年に制定されたときは42本であったが、1920〔大正9〕年に改正 (8本を除いて、新たに6技を加えた) され、40本となった。(前掲19)、167頁)
- 37) 嘉納治五郎 (1927) : 柔道家としての嘉納治五郎、(編) 講道館 (1988) : 嘉納治五郎大系第10巻、本の友社、104-105頁。
- 38) 同上、105頁。
- 39) 同上、105-106頁。
- 40) 前掲10)、86頁。
- 41) 同上、85頁。
- 42) 同上、85頁。
- 43) 同上、85頁。
- 44) 同上、84頁。
- 45) 同上、84頁。
- 46) 前掲5)、378頁。
- 47) 前掲8)、458頁。
- 48) 前掲10)、92頁。
- 49) 同上、92頁。
- 50) 同上、93頁。
- 51) 同上、95頁。
- 52) 前掲11)、33頁。

(きりゅう しゅうさく 本学非常勤講師)